

元祖最優ベイリンIF

ケセランパサランマン

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ベイリン卿が死亡フラグを潰し、王の忠臣、元祖最優の騎士として死ねる優しい剪定事象世界。

捏造多めのアーサー王伝説が終わったらFGO六章に入ろうかな、なんて妄想中

目次

第1話	1
第2話	9

## 第1話

蛮人ベイリン。

彼はアーサー王の円卓成立以前の騎士であり、当時最強であったと謳われる。

正史での彼は、行いが悉く裏目に出、最期は実の弟と殺しあうと言う悲劇を以ってその人生を終えた。

これは数えきれぬ剪定事象の中でも、異質極まる世界。

◆ この世界での彼は蛮人ではなく、円卓一二を争う忠臣  
—— 後にそう伝えられる。

◆ まず正史と最初に違った相違点は、彼の母親の仇である湖の乙女の

一

人を、彼が許したと言う事だ。

◆ 湖の乙女の一人が最優の騎士の剣を帯びて、アーサーのもとへ訪ねた。

その剣を見て、他の騎士達は湧き立つ。

その剣は、アーサー王が持つ最強の聖剣、エクスカリバーに勝るとも劣らない立派な剣だったからだ。

「ほう、実に見事な剣ですな、乙女殿」

無論、ケイも騎士の端くれであるが故、その剣に興味を抱いた。

彼の剣の腕前は特筆するほど良いとは言えなかったが、アーサーを守る臣下として、力は欲していた。

「……ありがとうございます、サー・ケイ。しかし、この剣など、私には必要の無いモノですし、出来ることならば誰かに譲渡したいのです」

乙女は最初は微笑んでいたが、言葉の尻に近づくほどに顔は曇っていった。

それを見たアーサーは、何かあるのですかと乙女に訊ねた。

「……この剣は貴方がたも御察しの通り特別なモノで、実に強力な剣

です。しかしこの剣はこの世で最も誠実で、優れた騎士でなければ柄から抜く事すらも叶わないのです」

その言葉に、周囲の騎士達は更に湧き立った。

誉れ高きアーサー王の臣下として、どの騎士も多かれ少なかれ己に自信を抱いていた。

我こそ、と考えるのも致し方なかった。

周囲の騎士達の熱を見て、呆れたようにケイが口を開き一つ乙女に提案を出した。

「ふむ、では我々アーサー王の騎士達がそれに挑戦し、もしも引き抜くことが出来たのならはその者の剣としてもよろしいでしょうか？」

「ええ、よろしいですよ……ただし先に忠告しておきますが、アーサー王はこの剣を抜けませんよ？ 聖剣エクスカリバーが既に王の手には有りますし、そもそもこれは王に仕える騎士の為の剣ですから」

「成る程、承知しました……さあ、我こそはと思わんアーサー王の騎士達よ！ 己が最優であると疑わぬのであれば、この剣を手取るが良い！」

そして、数多の騎士達による挑戦が始まった。

無理矢理引き抜こうとする者。

記念に触れておこうとする者。

王への忠誠を更に固める為に力を欲する者。

その他にも様々な騎士が挑戦したが……一向に剣は抜ける気配がない。

「……懐かしい光景ですね。選定の剣を思い出しました」

悲痛な雰囲気漂わせる王の間にて、アーサーはポツリとこぼした。

かつて似たような事があったものだ、と。

そしてめぼしい騎士達が全滅したところで――。

「王よ、俺も良ろしいですか？」

――最優が、その姿を現した。

「貴方は確か……」

「ベイリン、或いはバリンと。まあ、一応は王の騎士ですが、田舎者の

野蛮人ですよ。言葉遣いも荒くて申し訳ない」

「ではベイリンと。ベイリン卿、己を卑下する事はありません。貴方は私の騎士の一人なのですから」

「ハハ……それで、俺も挑戦して良いですか？」

「ええ、どうぞ」

「では、失礼して——」

そう言つて、ベイリンが剣の柄に手を伸ばす。

その手が柄をしっかりと握りしめ、ゆっくりと引き抜く。

そして——。

「つと、俺みたいな田舎もんが触れたら神罰でも下るかと思つて引いてみました、案外すんなりと引けましたな」

沈黙が場を支配する。

騎士達は固まり、あのケイですら目の前の騎士が引き抜くとは思つていなかったのだろう。

普段ならば出すであろう嫌味や軽口が全く出てこない。

アーサー王だけは、一人得心のいったような顔をしていたが。

「……オオオオオツ！引き抜いたぞ！ベイリン卿が、最優の騎士の剣を引き抜いたぞッ!!」

「ふむ……」

お祭り騒ぎの周囲の反応は特に気にしていないのか、剣から目を離さずにベイリンは最優の騎士の剣を数度振るってみせる。

そして、ニイと口角を上げ、笑った。

「実にいい剣だ。気に入った」

そうして鞘におさめてみせた。

このままベイリンを担ぎ上げようと言つた勢いの騎士達だったが、それを制止するかのようには、ピシヤリと乙女が口を開いた。

「ベイリン様、貴方は確かに今代最優の騎士なのでしょう。ならばこそ、その剣は手放すべきです。この剣が認めた、貴方ほどの騎士ならば、別の名剣をいずれ手にする筈です」

「……う、おい、俺が聞いた話じゃあ、この剣は引き抜いた者が得ると言う話の筈だが？いざ引き抜ける存在が現れたら心が変わったか？乙

女よ」

ベイリンの言い分はもつともだ。

だが、この剣には呪いがかけられていると乙女は言う。

曰く、この剣は所有者の最も愛する者を手にかける事となる、と。

「後出しで申し訳ありません……まさか、この剣を引き抜ける騎士が存在しているとは思いませんでしたので……」

「ふん……ならばこそ、この剣は俺以外が持つ訳にはいくまい？俺は最も優れた騎士なのだろう？その騎士が、呪い風情を恐れては我が王の名に泥を塗る事となる」

ベイリンは今の今まで下っ端の騎士であった。

確かに剣の腕はアーサーの配下の中でもトップレベルではあったが、それを他の騎士が目にする機会など今までなかったのだ。

王の騎士達の中で最も優れた者と認定された彼は、少々気分が高揚していた。

無論、王に対する忠誠もその分増したと言っている程に今の彼は強い。

王への忠誠の証として、何よりもわかりやすい武勇を彼は欲した。

「……決意は、固いようですね」

「ああ。忠告には感謝する、湖の乙女よ」

それだけ言って、湖の乙女は後にベイリンに降りかかるであろう災難を予見して悲しみ、キャメロットを去っていった。

こうして、野蛮なる騎士ベイリンは、一転して最優の騎士として暫しの間名をブリテン島中に轟かせる事となる。

その活躍は、アーサーと敵対する他の王の軍勢を一人で殲滅したとも伝えられるほどに凄まじいものだったと言う。

そして、アーサーに敵対する王達への戦が少し落ち着いた頃に、ベイリンはアーサーに旅に出ると告げた。

「理由を聞いてもよろしいでしょうか。サー・ベイリン」

「……最優の騎士としては情けないと思われるかもしれないが、俺には仇がいるのですよ、王。俺は母を殺したとある魔女を探しているです」

復讐。

成る程、確かに最優の騎士としては少々名に泥をつける行為ではあるだろう。

だが、剣は未だベイリン以外には抜けない。

ならば、その復讐すらも剣は認めていると言う事だ。

「無論、王達との決戦時には何処に居ようと駆けつけます。だからどうか……」

「構いませんよ。貴方はこれまで多くの功績を残し、私に貢献してくれました。ちゃんと戻って来てくれるのならば、私も文句など言いません」

「……感謝します。あなたが王で本当に良かった」

そう言つて、ベイリンが踵を返し歩き始めたその瞬間。

ベイリンから、途轍もない殺気が噴出した。

アーサーも困惑してベイリンに訊ねかける。どうしたのか、と。

「ベイリン? どうし——貴女は?」

そしてベイリンに近付き、彼の視線の先に居た人物を見て、アーサーは困惑した。

「久しぶりですね、アーサー」

「貴女は……エクスカリバーを授けて下さった湖の……」

「記憶に留めておかれたようで光栄です……そして、そちらの方が、あの蛮人ベイリンですね?」

「……湖の乙女。私の騎士をそのような名で呼ばないでください」

思わず、アーサーは顔をしかめる。

が、暫くして場に漂う雰囲気は異様なモノになっていくことをアーサーは感じていた。

何方もこの様に礼儀に悖る態度はみだりにしないはず。

どうしたと言うのか、二人とも——?

そう困惑しているアーサーの前で、遂にベイリンが最優の騎士の剣を引き抜き、湖の乙女にその切っ先を向けた。

「……何をしていますのです! サー・ベイリン! その方は私の恩人ですよ!」



「……こればかりは止めないで頂きたい、王よ。私が先程話していた魔女——それはこの女の事だッ!!」

「随分な言い草ですね……! 私の兄である騎士を殺した、貴方がそれを口にしますか!」

「ハッ、理由や経緯はどうあれ、アーサー王ではなく他の王に従う騎士、戦であるならば何者であれ敵は切らねばなるまい? 子供でもわかる道理だぞ、魔女め!」

目の前で交わされる舌戦に、アーサーは閉口した。

片や臣下であり、今の今まで尽くしてくれた最優の騎士。

片やエクスカリバーを与えてくれた大恩ある湖の乙女。

どちらの味方をすればいいのか、アーサーは固まってしまった。

そして、その一瞬の内に、湖の乙女はベイリンではなくアーサーに向けて言葉を吐いた。

「アーサー王! 貴女が手にするその聖剣! エクスカリバーの代価を今、ここで求めます! この騎士を騙る蛮人……或いはこの者に剣を与えた湖の乙女の首を!」

「なッ……! 落ち着きなさい! 乙女!」

「ハ、正体を表したな魔女が! 王よ、この者をどうか斬らせて頂きたい!」

「ベイリンも! 火を注がないで下さい!……マーリン! マーリンはいますか!」

アーサーは己が頼る宮廷魔術師を呼び出す。

彼ならば、この場を上手くしのいでくれるだろうと考えたからだ。

今にも乙女に切りかかりそうなベイリンを抑えつつ、湖の乙女にも落ち着くよう話しかけるアーサー。

ほんの少しして、マーリンがその姿を現した。

「……おやおや、影から見ではいたけれど。ベイリン、君は取り敢えず少し頭を冷やしたらどうだい? 王の最優をこれからも名乗りたいのであれば、ね」

「……………ッ!!」

歯が砕けるのではないかと言うほどに激しい歯軋りが、ベイリンの

葛藤を物語っている。

そして、一際激しく乙女を睨み付けたかと思うと――。

「……………許した訳ではない。この様な邪悪であれ、女は女……………婦女子を騎士が切ったとなれば王の名にも泥を塗るだろう。だが忘れるな、貴様はいずれ天の火に焼かれ地獄に落ちるだろう。俺は精々、天から母や弟と共に貴様を嘲笑ってやろう……………俺は城に戻らせてもらどうぞ、マーリン」

「最後に忠告しておく、魔女。王がいなければ貴様の首……………天が罰を下すまでも無く既に地に落ちていたと思え」

去り際にそう告げて、辺りに充満していた殺気を霧散させた。

――悲劇の騎士は、ここで悲劇への道筋を一つ、自ら絶つた。

もしも、ここで彼が制止を無視し乙女に斬りかかっていたら、彼の人生は間違いなく破滅へと向かう筈だったのだから。

隠し切れぬ怒気と殺気を身に纏いながら、ベイリンは大人しく城へと帰っていった。

これにはアーサーもマーリンも息をついた。

「さて、此方は取り敢えず大丈夫そうだが、問題は……………」

「なぜ止めるのです！アーサー王！マーリン！彼は我が兄の仇なのですよ！」

「湖の乙女、君も落ち着きたまえよ。ベイリン卿は矛を引いたのだから。彼よりも古き者である精霊の君が落ち着きを取り戻さなくてどうする？……………確かに、君は僕の願いを聞いて儀式通りエクスカリバーをアーサーへ与えてくれた。それには頭が下がるが……………仇が目の前にいるにも関わらず、復讐心を呑み込んだ立派な騎士へ、君が一方的に攻撃するつもりかい？」

「……………それはッ！しかし！」

「……………湖の乙女。貴女の要求はそれ以外ならば騎士道に則るモノである限り何でも叶えましょう。ですから、どうか抑えてください。ベイリンも、貴方と同等かそれ以上の殺意を抱いていた筈なのです」

「……………あの者を、貴女は庇うと言うのですか？偉大なる赤竜の化

身であるアーサー王！」

はあ、と溜息をついて、マーリンは魔術を発動させる。

これ以上話していても疲れるだけだと判断したのだ。

「まだ、ベイリンの方が君よりは冷静だったよ。もう帰りなさい、送ってあげよう」

「な————マーリン！何を————！」

憤怒の形相を端正な顔に浮かべたまま、湖の乙女はマーリンの手によりアヴァロンへと強制送還された。

無論、この様な事が再び起きぬよう、仕掛けもキッチリとしてある。

「マーリン、少々強引過ぎたのでは……」

「まあ、古い概念である精霊の彼女の考えはちよつとやさつとで変わるものではないからね。ああ、アーサー、君は再びベイリンと乙女が出会う事を恐れているのかな？」

「まだ遺恨は残ったままです……もしまた彼と彼女が出会えば……」

「ふふん、君ならそう言うと思つて、彼と彼女には不邂逅の呪いをかけておいたよ。互いに姿が認識出来なくなる魔法だ。僕オリジナルだから、湖の乙女達精霊にすら解けないよ……神霊が関与すれば話は変わるけど」

「……大丈夫なのですか？」

「……そう言われるとちよつと温かったような……？次に見かけたら記憶を弄っておくよ。双方の」



こうして、ベイリンは一先ずの落とし穴を回避した。

だが、彼にはまだ多数の地雷が未来に待っている。

それらをどうしていくのか、それを一先ずは追っていくとしよう。

## 第2話

その日のケイは、珍しく機嫌が良かった。

アルトリアがアーサー王となって以来、ケイは心を痛めながらも彼女に尽くして来た。

しかしある日、ケイはアルトリアに替わる王の素質を持つ者を見つけたのだ。

しかもその者は、立派で聡明で、血筋も貴く腕っ節も並みの騎士では比べ物にならないと言う完璧な存在だった。

「どうだ？このキャメロットの王城は」

「ええ、流石は誉れ高き騎士王の城と街です。感服いたしました」

サー・ガウエイン。

後に円卓でも最強を争う優れた騎士であり、アーサー王の甥でもある騎士。

「フン……そう畏まらなくても良い。いずれはお前の城になるやも知れんのだからな」

「ハハハ、そんな事はありませんでしょう。アーサー王は私などよりも立派なお方です。ご冗談も程々にして頂けると有難いです、サー・ケイ」

周囲の騎士達は、そんなガウエインとケイの様子を見て、余り良い顔をしない。

これはガウエインではなく、ケイに問題がある。

アーサー王が信頼し、また重用しているケイではあるが、弁舌は兎も角剣の腕はそう大したモノではない。

ガウエインがアーサー王の甥であると言うことは他の騎士達も耳にしている話なので、側から見るとケイがガウエインに取り入ろうとしているようにしか見えないのだ。

無論、ケイの真意はそんな浅はかなモノではないのだが。

「……ここが、アーサー王のおられる玉座の間だ。くれぐれも粗相はするなよ？王も俺も、お前には期待している」

他愛のない話をしながら、ケイはガウエインを値踏みする。

そして、そうこうしている内に、遂にアルトリアが待つ玉座の間が彼らの眼前まで迫っていた。

「わかりました……失礼いたします！」

そう言って、ガウエインは玉座の間へと足を踏み入れた。

「……これは」

そして、その存在感に圧倒される。

華美過ぎず、質素過ぎない装飾は星の光を宿しているかのように薄く光を帯びており、無駄のない完成された場と言うイメージを思い起こさせる。

だが、それだけではない。

その中央に座す、冠を頂いた騎士の王。

アーサー王の威光が北極星の如く、無数の装飾星の煌めきの中でも劣らず輝いていた。

「良く参られましたね、サー・ガウエイン。名乗りましょう、私こそがこのブリテンの王、アーサー・ペンドラゴンです」

その凜とした声に、浮ついていたガウエインの気持ちりが引き締まる。

身体は小さいながらも、この者こそが真の王者。

ブリテンを導く偉大なるものだと理解する。

「ッ、失礼しました。つい見惚れてしまいました……私はオークニーの王、ロットが長子ガウエイン。アーサー王、貴方の騎士となるべくして参上いたしました」

「……ええ、存じています。しかし貴方の父君と私は……」

「過去の確執は気にしないで頂きたい、王よ。私は父を尊敬していますが、それ以上に貴方という存在に憧れているのです。我が父の軍勢も、貴方の騎士達を傷付けたでしょう？ お互い過去の事は水に流すべきです」

元々ガウエインはアーサーを恨んではいなかった。

戦争であれば、何方かが死ぬ。

敗者と勝者が生まれる、それは当然の事だからだ。

そして、直にアーサーの王気に触れ、ガウエインは確信した。

「この王こそ己が真に支えるべき王だと。」

「……ありがとうございます、ガウエイン。そして、私の騎士になりたいと言う話ですが、無論問題ありません。来る者拒まずですから」

「ハッ、我が忠誠と剣はこれよりアーサー王、貴方様の物です……では、失礼します」

「期待していますよ」

王が今は一介の一人の騎士に過ぎない己に期待してくれている。

その言葉が、彼により一層の忠誠を誓わせるのであった。



後の太陽の騎士ガウエインと騎士王アーサーが初めて顔を合わせていたその頃。

ベイリンは湖の乙女と会っていた。

無論、彼を憎んでいる乙女ではなく、彼女は彼に最優の騎士の剣を与えた乙女である。

「……それで、今更何の用だ？ 貴女にはこの剣を与えてもらった事を感謝しているのだが」

「貴方の仇のあの乙女に関して、少しお話しさせてください」

「……自分の同胞は殺すな、とでも言いたいのか？」

ベイリンはマーリンから掛けられた魔術の事を教えられている。

もう彼女とは会うことがないはずなので、貴女の心配は杞憂だと、そう伝えようとして――。

「彼女が、貴方が私の首を求めていた事はマーリンより聞き及んできます。彼女は、私にも恨みがあるのです」

予想していたモノとは違う話をしだした乙女に、少し反応が遅れた。

「……なんだと？」

「彼女の父君は……紆余曲折ありまして私が殺したも同然なのです。故に、私から剣を与えられた事も相まってあそこまで過激な事を申し立てたのでしょうか」

「貴女と魔女の間で何があったかは知らんし、知るつもりもないが……我が母の仇である以上、あの魔女には同情出来んな。それで？」

うやら貴女の話はそれだけでは無いようだが」

この女は強かだと、ベイリンは野生の嗅覚とでも言うべき直感で感じ取っていた。

そのような話は本題ではないとベイリンにも予想がついた。

「ええ……これはベンウィックとガリア周辺一帯を支配する湖の乙女……ギネヴィア様に聞いたお話なのですが、近々ベンウィック相手に他国が戦を起すだろう、と」

そして、湖の乙女が切り出した本題は、ベイリンを驚愕させた。

何故ならば。

「なんだと？ベンウィックとガリアと言えば、王の盟友であるバン王とポールス王が治めている国ではないか！」

そう、その二つの国の王は主君アーサーの盟友なのだ。

それが攻められるとするならば、こうしている場合ではない。

この話を王に伝え、今すぐ軍を編成し進軍せねばならない。

「貴方には、アーサー王の軍勢に先んじて彼らの援軍に向かって欲しいのです。彼の一騎当千、最優の騎士であるベイリン卿に」

「……だが、ブリテンと彼の地には海が隔たっている。俺一人分の船ならば直ぐにでも用意出来るが、あの速度では間に合わんのではないか？」

「ええ。ですので、私がこうして参ったのです……湖の乙女の加護。水面を歩けるようになると言うモノです。受け取って頂けますか？」

それは聞いたことがある祝福だった。

主君であるアーサー王も、たしかまた別の湖の乙女に同じ加護を受けていたと彼は記憶している。

「……確かに、俺の脚力であれば船よりも速く、全速力で走れば一日あれば辿り着くだろうが……海を駆ける、と？」

そこで言葉を切り、ベイリンは沈黙する。

やはり無理な相談だったか、大人しく先にアーサー王に伝えるべきだったか、と乙女は立ち上がろうとして。

目の前の男が笑っていることに気付いた。

「面白い。是非やらせてくれ」

と言いつつ放った。

時は終わりがけとは言え未だ神代。

海には強力な魔物がいたり、危険はあると言う事は目の前の男ならば理解している筈なのに、面白いと言えるその精神性は間違いなく英雄と言えるだろう。

「王にはまだまだ返せぬ恩がある。我が弟ベイランを王の騎士にしてくれた事と言い、私をあの場で冷静にしてくれたことと言い……王がいなければ、俺は最優の騎士などとはとうの昔に呼ばれなくなっていたかもしれない……ああ、そう言えば」

そこで思い出したかのように唐突にベイリンが声をあげた。

「貴女の名は何と言うのです？正直、学の無い身としては同じ湖の乙女が多すぎて覚えきれんよ」

「……分かりました。では、私の加護を授けます。大人しくして下さいね。それと、私の名前はニムエとでもお呼びください」

そして、ニムエは妖精文字をベイリンの肉体と魂、そして最優の騎士の剣に刻んでいく。



そして、アーサーのもとへガウエインを案内したケイは、今マーリンと対峙していた。

「おい、この非人間……」

「おや、なにかな？サー・ケイ。随分と急いで来たようだけど……ガウエイン卿の案内は終わったのかい？」

「……黙れ！貴様なら俺の要件などとうに理解しているだろうが！アルトリアが王である必要などもう無いだろう！ガウエイン、あの憎らしいまでの好青年ならば、次の王としての力も、素養も、血筋も全く問題ない筈だ！」

呑気なマーリンの口調に、ケイの怒りが破裂する。

普段は冷静に振舞っている彼が、この様に激情を露わにする所を見れば、他の騎士達も戸惑いを隠せないだろう。

「そうだねえ、確かに彼は優秀なようだ。血も、アルトリアの甥である後継者としても、さしたる問題はないだろう」



「だったらー！」

食い下がるケイに。

「でも彼では力不足さ」

マーリンは残酷な真実を口にした。

「今までのブリテンならば彼でも十二分に王として通用しただろうさ。だが、神秘が薄れていくこれからの新時代の王としては、彼は相応しくない。君も薄々気付いているだろう、ガウエインではアルトリアの王才に及ばない、と」

「……クソツッ！」

ケイも頭の奥では理解していた。

アルトリアを超える王など、このブリテンには未来永劫現れないだろうと言う事は。

名君ウーサーと赤い竜の力を宿した人造の、至高の王。

それを超える存在など、神秘が薄れて来ているこの先の世界では誕生する筈がないのだ。

「古い時代の終わりを告げる鐘として……バン王とボールス王の命は、もうすぐ尽きるだろう」

そう語るマーリンの眼はあくまでも冷静に、冷徹に、この世界全てをただ静かに見据えていた。

……しかし、本来ならばもう既に死していた筈の騎士が、ブリテンの様々な運命を少しずつ歪めていく。